

南加賀古窯跡群詳細分布調査  
事 業 報 告 書

1979. 3

小松市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、小松市教育委員会が主体となり、昭和52年度及び昭和53年度に国庫補助を得て実施した「南加賀古窯跡群詳細分布調査事業」の報告書である。
- 2 事業の実施にあたっては、下記の先生方の指導・助言を得て、事務局調査員が主として事業にあたった。

### 調査指導員

高塚 勝喜	石川考古学研究会長
上野 与一	石川考古学研究会幹事
橋本 澄夫	" "
岡下 権	" 会員
山本 七郎	" "
土井 輝男	小松市立博物館専門委員

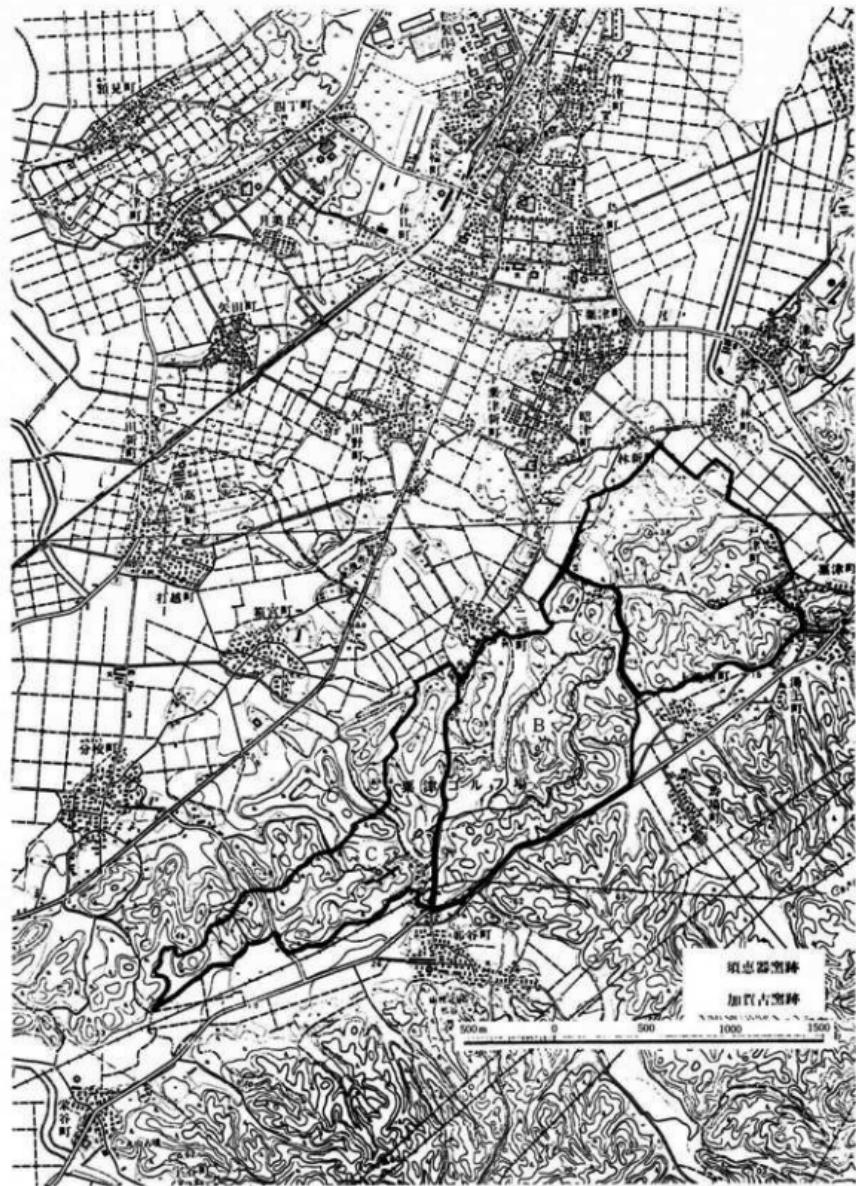
### 地元指導員（昭和52年度）

新谷 盛久	郡谷町内会長
橋本 一男	上荒屋町 "
南出 良政	下栗津町 "
山本清太郎	戸津町 "
岡島 吉次	林町 "
吉村 洋志	二ッ梨町 "
大吉 勇双	矢田野町 "

### 調査事務局

(昭和52年度)	(昭和53年度)	
藏藤 佐一	藏藤 佐一	市教委社会教育課長
坂本 孝暉	古橋 利明	" " 補佐
宮越 権		" 文化係長
小村 茂	小村 茂	" 文化係主事
宮下 幸夫	宮下 幸夫	" "
岸本 祐一	岸本 祐一	" "

- 3 本報告書の作成にあたっては、本文の執筆・図版を小村が、写真撮影を宮下が担当した。また遺物の実測には、指導員の先生方の手を煩わした。



第1図 調査対象地域

# I 調査の経緯

## 1. 調査の契機

本報告書の表題にとりあげた「南加賀古窯跡群」という名称は、小松市南部の林町から加賀市松山町にかけて帯状に伸びる標高45m前後の丘陵に分布する須恵器及び中世窯跡の総称である。しかし、近年の分布調査の伸展で、これと「能美古窯跡群」との中間地域においても須恵器窯跡が発見されるなど、須恵器生産ブロックの再検討が必要になってきたため、この名称についても再考しなければならない状況に至っている。また、昭和25年の戸津六字ヶ丘古窯の調査以来、諸々の開発事業にともない、事前の発掘調査が実施されてきたが、いずれも調査終了後に消滅するという極めて消極的な対応策しかとられておらず既に多くの貴重な遺跡が消滅してしまった。そして、近年の開発事業、とくに小松バイパス、カドミ対策事業の一貫としての土砂採取や土地改良事業等のために、その多くが煙滅の危機に直面している。したがって、これら諸開発事業に対応し、抜本的な保護対策を講ずることが急務であり、先の観点をも合せ、その一貫として、昭和52年度、53年度の2年において、古窯跡等の詳細な分布状態を掌握する「南加賀古窯跡群詳細分布調査事業」を実施したのである。調査方法等については後述するが、踏査もれの遺跡も多いものと考えられるので、事業完了後もさらに分布調査を心掛けたいと考えている。

## 2. 調査の方法と経過

調査は、南加賀古窯跡群のうち、小松市域3054m<sup>2</sup>を三地域に区分し、昭和52年度において、A・C地域1783m<sup>2</sup>、昭和53年にB地域1270m<sup>2</sup>の範囲で分布調査を実施した（第1図）。

昭和52年度調査は、中世窯跡と須恵器窯跡とを区別し、先ず、中世瓷器窯跡のうち保護対策が立ち遅れているカミヤ古窯跡群と小天王谷古窯跡群の範囲、基數及び操業時期等の究明を目的として試掘調査を実施した。

カミヤ、小天王谷古窯跡群調査日誌

8月1日

カミヤ古窯跡群の範囲等確認のため、調査区域の伐木作業を開始する。

8月2日

伐採作業を継続する。あわせて、表面採集を実施し、一部においてトレンチの設定準備

にかかる。

8月3日

伐採作業も一部を残してほぼ完了したので、伐採した雑木の跡仕末を行い、トレントの設定をおこなう。トレントは、調査区域内の斜面に沿って、上方より第1トレント、第2トレントとし、西側に第3トレント、第4トレントを設ける。いずれも幅1mである。

8月4日

各トレントの掘り下げ作業を開始する。

8月5日

第1～第4トレントの掘り下げ作業を継続したが、遺構、遺物の検出なし。第2トレントの下方、斜面傾斜の変する個所に第5トレント、さらに下方に第6トレントを設定する。第4トレント東方隅においてこね鉢の出土を見る。

8月8日

第5トレントで窯体の一部と思われる焼床面を検出した。第6トレントでは木炭や灰に混ざって多量の甕、鉢破片が出土し、広範囲な灰原の存在を想定させる。午後、3名にて小天王谷古窯跡群の調査区の伐木作業を始める。

8月9日

カミヤ古窯では、広範囲に遺物が散乱するが、遺物層は二次的な堆積とも考えられ、窯体は既に破壊されている可能性がある。写真撮影ののち、一部埋め戻しを開始する。

小天王谷の伐採作業継続。

8月10日

小天王谷古窯跡群の調査区域西方に第1トレント、斜面傾斜角の変換地点に第2トレントを設定する。ひきつづき第1トレントの掘り下げを開始する。

8月11日

第2トレントの掘り下げを開始する。第2トレントでは、トレント西端より3.5mの地点で灰層を確認、甕類及び鉢類破片の出土があったが、第1トレントでは遺構、遺物を検出できなかった。

8月12日

第2トレント中央にて灰層の東端を確認、窯壁の一部が散乱しており、灰原の広がりより察すると、窯は斜面傾斜の変する部分より上方に位置するものと考える。第1トレント

は約 1.2m 堀り下げたが、遺構・遺物もみられてないので断念する。

8月16日

第2トレンチを東方へ 6 m 延長する。こね鉢の出土があったが、灰層は認められなかつた。

8月17日

調査区東方斜面に第3トレンチを設定、これに平行した斜面下方に第4トレンチを設けた。第3トレンチは約50cm 堀り下げたが、遺物すら発見できなかった。第4トレンチでは灰層の一部を検出したが、窯体は確認されなかった。

8月18日

第4トレンチの堀り下げを中止し、農道下方の斜面に小ピットを設けることとした。かなりの遺物が包含されているのが判明したが、農道が敷設されているため、調査を断念した。

8月19日

小天王谷古窯の調査区の埋め戻し作業を開始する。

8月20日

小天王谷調査区の埋め戻し作業の完了の後、カミヤ調査区の埋め戻しを再開する。あわせて出土遺物の運搬を行う。

8月22日

カミヤ調査区の埋め戻し作業を終了。出土遺物及び器材の集積と運搬を行い、全作業を完了する。

#### 須恵器窯の分布調査

須恵器窯跡については、昭和52年度の10月23日より開始し、11月27日の実動17日間を延22人の指導講師に依頼して分布調査を実施した。

昭和53年度においては、9月1日より分布調査を開始する予定であったが、実際は9月3日になった。調査期間は2月末日を期限としたが、本年は天候にめぐまれ、無雪時期が多くなったこともあり、2月10日をもって調査を終了できた。実動日数61日、延 162名が調査に参加した。この結果については後述する。

## II 既往の調査

### I. 六字ヶ丘古窯跡

#### 位置と状況

二ッ梨町より戸津町に至る道路に開口した小谷の左斜面の雑木林中にある。

  
昭和25年8月、上野与一、高堀勝喜氏の指導のもとに、松任農学校郷土クラブが主体となって発掘調査が実施された。しかし、県下で最初の窯跡調査であって、十分に行き届いた調査ができなかったようであり、昭和28年に刊行された調査報告書も今日の研究資料として堪えうるものでないのが残念である。窯跡の形状については、報告書を引用すると、「登の穴窯であって傾斜は約30度前後、形は……。入口即ち火を焚く所は幅180cm、高さは20cm前後」であった。

#### 遺物

窯内によりかなりの数にのぼる須恵器が確認されている。しかし、出土品の所在については不明であり、器種構成や須恵器個々の形状等を知ることができない。報告書の記載事項より察すると、壺、皿、壺及び窯道具等が多量に含まれており、壺、皿の出現などの検討から10世紀前半の須恵器窯と考えられる。

第2図 六字ヶ丘古窯実測図

### 2. 一貫山I号窯

#### 位置と状況

戸津町より二ッ梨町に至る大谷の開口部左側丘陵の独立丘一貫山の南西斜面に所在する窯で、上下2層からなっている。上部をI-I号窯、下部をI-II号窯と呼ぶ。窯体は土砂採取で発見されたが、調査時は削り欠いた状態で、焼成部と燃焼部が露呈していた。また、灰原も削平されていた。

窯体は、全長9.9m、最大幅2.3m、主軸方位N-45°Eを計る。I・II号窯ともほぼ同様の形態である。

#### ① 焚口及び燃焼部

傾斜角変換部分までの延長2.5m、焚口幅約1.3m、傾斜角5度を計る。焚口部の炭堆

積は判別し難いが、およそ2層確認できた。燃焼部の壁にはスサ状の植物遺存体が多く検出できたが、窯内では最も剥落が起りやすい部分であり、数度の修復で壁を補強しているためであろう。

### ② 焼成部

焼成部は主軸延長上で7.4m、最大幅2.3mをはかる。床面傾斜は、焚口より約2.5mの地点から約20度で直線的に煙道部に至っている。窯壁に修復の痕跡は認めがたい。



第3図  
—貫山1号窯出土遺物実測図

### ③ 煙道部

調査時に既に削平されており、確認できなかった。煙道部直下の床面に壺類が整然と並べられていた。窯底より地上までは約2.5mであった。

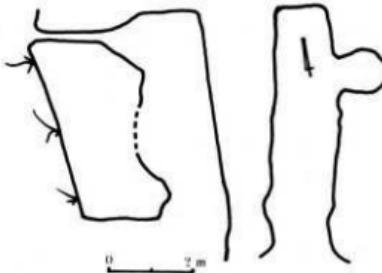
### 遺物

台付壺、壺、蓋が大半であり、焼台に使用したと思われる甕破片も多い。特異なものとしては、広口壺と獸脚がある。また覆土中より、丸底壺と無頸壺が出土しているが、窯跡との関係は不明である。

## 3. 戸津1号窯

### 位置と状況

戸津町通称アナ山の南斜面に所在する。岩盤を穿った掘り抜き平窯である。主軸上の全長は5.4m、最大幅1.6m、主軸方位をほぼ真南にとる。煙道を2ヶ所有する等、特異な窯構造をもつている。



第4図 戸津1号窯実測図

### ① 焚口及び燃焼部

焚口部分は崩落が激しく厳密な計測値を得ていないが、およそ1.2mであろう。燃焼部は明瞭にできない。

### ② 焼成部

燃焼部との境が不明瞭であるため主軸長は計測できない。床面傾斜は約3度で、殆んど

平窯の部類に入る。

### ③ 煙道部

煙道は窯尻床より約4.2mで地上に開口している。窯尻より焚口に向って1.2mの地点にさらに1ヵ所の煙道をもつ。このような特異な構造は他に例がみられず、このためタタラ関連遺跡と考えられている。確証はない。戸津2号窯もほぼ同様の形態をとるものと考えられているが、未調査であり、詳細については不明である。

### 遺物

昭和25年の調査の折、1点のほぼ完器に近い須恵器壺が出土しており、昭和47年の調査時にも糸切り底をもつ壺破片が出土している。他に長胴甕の破片もある。

## 4 戸津5号窯

### 位置と状況

戸津町より林町に至る道路の西側には西南に伸びる谷がある。窯はこの谷に面する丘陵南西斜面に所在する。全長6m、最大幅1.2m、主軸方位N-26°-Eを計る。比較的小形の須恵器窯である。

### ① 焚口及び燃焼部

焚口付近の遺存状態は良好で、天井部も残存していた。床面は、灰原より3度で緩く下降し、焚口直下で最も深くなり、燃焼部にかけて20度の勾配で焼成部に至る。焚口幅0.9m、高さ0.5mである。

### ② 燃成部

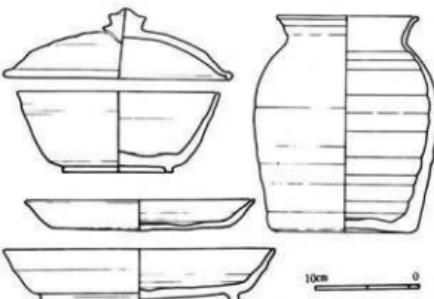
床面傾斜が変ずる地点、焚口より1mの部分をもって燃焼部と区別する。主軸延長5m、最大幅1.2m、斜面傾斜角25度で窯尻に至る。

### ③ 煙道部

煙道は確認できなかったが、築窯当初、一部地上に築かれた可能性がある。

### 遺物

壺、蓋、台付壺、皿、盤などの供膳形態の他、鉢、瓶、壺などがあり、特に長頸甕の存在が顕著である。



第5図 戸津5号窯出土遺物実測図

## 5 戸津 5号窯

この窯は、昭和25年に発掘調査が実施された六字ヶ丘古窯と同一窯である。遺物は、双耳瓶、壺、坏、台付坏、蓋、塊、皿、台付皿などがある。

## 6 戸津 9号窯

### 位置と状況

六字ヶ丘古窯の右下方にあり、全長 9.5m、最大幅 2 m、主軸方位 N - 36° W を計る。窯体は昭和25年に一部発掘調査されたが、調査は半ばで放棄されており、窯跡は溝状に露呈していた。

#### ① 焚口及び燃焼部

焚口及び燃焼部は昭和25年に掘りかえされており、窯壁は存在していなかった。焚口幅はおよそ 1 m、床面は約20度で燃焼部に至っている。

#### ② 燃成部

主軸延長上で 7.7m、傾斜角40度の急勾配で煙道部に至る。部分的には数度の修復が認められる。

#### ③ 煙道部

煙道部は不明である。

### 遺 物

普遍的な坏、台付坏、皿にともない、塊、台付皿の量が増えている。蓋には紐が消えている。糸切りにより切り離しが顕著である。双耳瓶が目立つのもこの窯の特徴である。

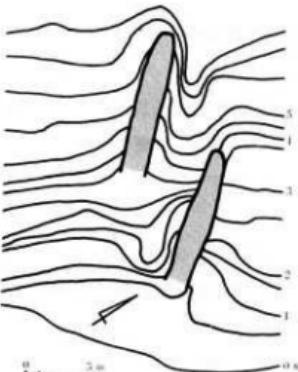
## 7 桃の木山 1号窯

### 位置と状況

那谷町より分校町に至る県道に交差するように那谷川が西流している。この那谷川が、那谷分校線と交わる地点より北西にひときわ目立つ小谷がある。この小谷の開口部に立つ山が桃の木山で、窯はこの丘陵の東斜面に位置する。窯体は主軸延長 7 m 最大幅 1.6m、主軸方位 N - 75° W を計る地下式の形態に属する。

#### ① 焚口及び燃焼部

焚口は幅 1.3m、燃焼部は焚口より 0.8m の部分で幅が減しており、1 m を計る。この



第6図 戸津 8号・9号窯地形図

部分を燃焼部との境とみなすことができる。

### ② 燃成部

燃成部は主軸延長上で 6.2m、傾斜角20度を計る。

燃成部下方は、2層の床面があり、1次燃成後に修復しているが、燃成部上方床は2次燃成時に再度使用している。

### ③ 煙道部

地上部に径約 2 m の堀り方があり、円錐形で窯体に至っている。

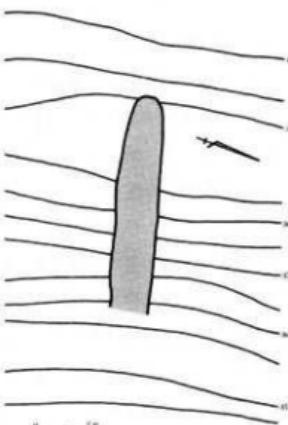
#### 遺物

出土した遺物は整理箱にして30個分あった。器種は壺、蓋、台付壺、擂鉢、瓶、甕などがあり、長頸瓶の存在が目立つ。

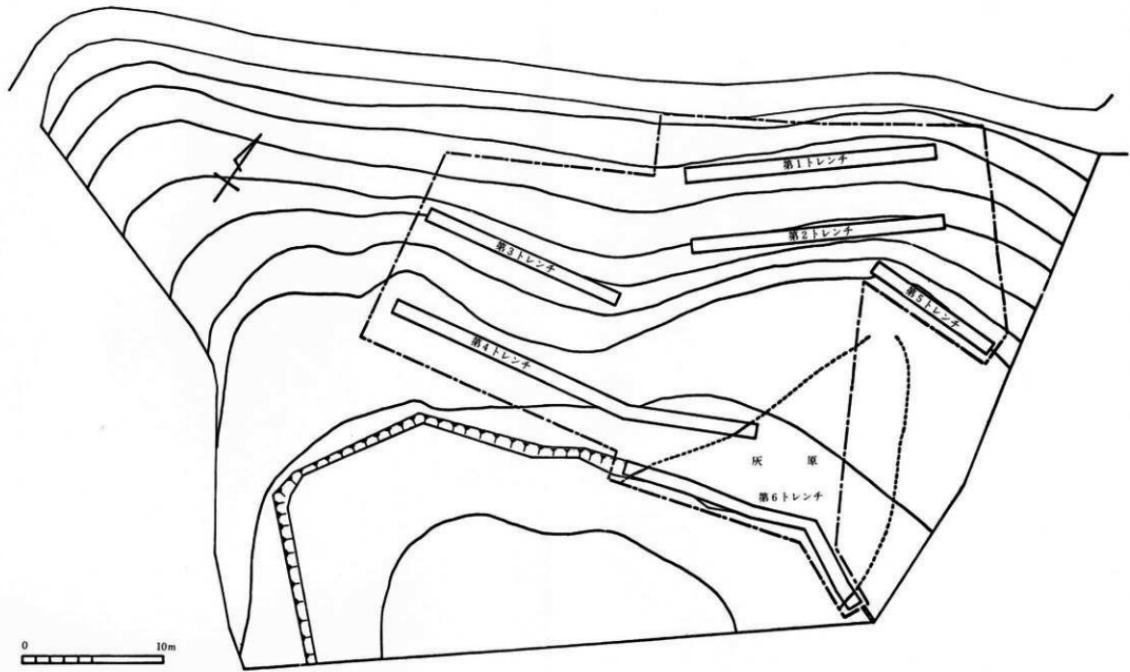
### 8 昭和52年の調査

カミヤ古窯跡群は、地表観察の結果、極めて広範囲に亘って陶片の散乱が認められたため、調査開始当初、複数の窯跡の存在が想定された。斜面上方より等高線に沿って6本のトレンチを設定したが、第1・2・4トレンチ及び第5トレンチでは地表下約20cmで地山が露呈した。第3トレンチでは若干の陶片が検出されたが、檜林や戦時中の畠地造成で削平され、陶片が散乱したものと思われる。窯体は既に消滅している可能性がある。

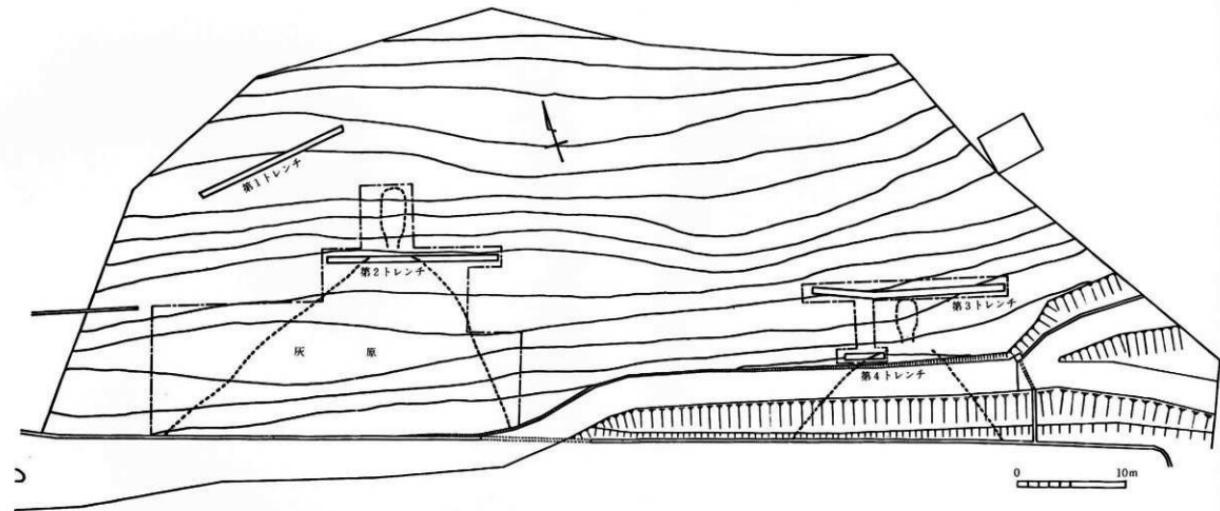
小天王谷では陶片散乱個所が2個所あり、東方を1号窯、西方を2号窯とした。2号窯灰原は現在の農道面に露呈しており、残存する面積は約267m<sup>2</sup>である。1号窯灰原は現農道下にあり、大半は農道造成時に消滅しており、農道崖に陶片が確認される。窯体は残存すると思われるが、表上よりかなり深いものと考える。1号窯第2トレンチは焚口付近の灰原に設定したものであり、窯体はこのトレンチ上部からほぼ完全な形で遺存するものと推測する。小天王谷古窯跡群は今まで、その基數をめぐって意見の相違があり、今回の調査で、2基の中世窯で構成されていることが判明した。



第7図 桃の木山1号窯地形図



第8図 カミヤ古窯跡地形測量図



第9図 小天王谷古窯跡地形測量図

### III 遺跡の位置と分布

#### I 地形による区分

古窯跡の分布する丘陵は、連続する丘陵と、これを分断する谷とで区分することができる。丘陵ブロック毎に遺跡の分布をみると、A地区は、戸津町集落の背後に連なる丘陵で標高42.3mの主丘とこれに連なる三丘陵からなる。丘陵を被覆する粘土層は比較的薄く、部分的に新第三紀の安山岩質凝灰岩類の露頭がみられる。この地区では、窯跡数が稀薄で西隅に一基認められるにすぎないが、この窯跡は岩盤の掘り抜き窯である。

林町を北限とし、二ッ梨一貫山から戸津町出村を結ぶB地区は、標高43.8mの主丘と、これに連続する8丘陵及び1独立丘からなっている。この丘陵の北端は比較的平坦な尾根からなっており、窯跡の大半は、丘陵の南西、南、東南斜面にみられるが、平野部に面する丘陵斜面では、焚口を北もしくは北西方に向けて構築するものもみられる。

C地区は、栗津町より那谷町を経て、加賀市栄谷町に回折する栗津地溝地帯に接して連なる東西約2.5kmの丘陵地域で、二ッ梨、那谷町、栗津町を結ぶ広い地域である。しかし、地溝帯に沿って新第三紀の岩盤の露呈が多く、窯跡は谷間の狹少な堆積粘土層に数基のグループが認められるにすぎない。これとは反対に、平野部側では丘陵南西斜面にかなり多くの窯跡がみられる。この地区では、鉱滓の散布地が地溝帯に沿って点在しているが特徴である。

D地区は、C地区の北西側に連なる丘陵で、標高49.6mを主体とする狹少な地域である。平野部に面する丘陵斜面に7基の須恵器窯が認められたが、タカラの密集地域も含んでいる。那谷町背後から加賀市境へ連なる丘陵をE地区とする。この地区では、谷が複雑に入りこんでおり、かなりの窯跡が確認できるものと期待したが、7基の中世窯と地溝帯に面した丘陵斜面で2基の須恵器窯を検出したにとどまった。

これら5地区を概観すると、丘陵の組成にそれぞれ差異が認められ、窯構築の際考慮された要因が存するものと考える。相対的にみた場合、地溝帯に面する丘陵よりも、平野部に近い丘陵に多数の窯跡が認められる。

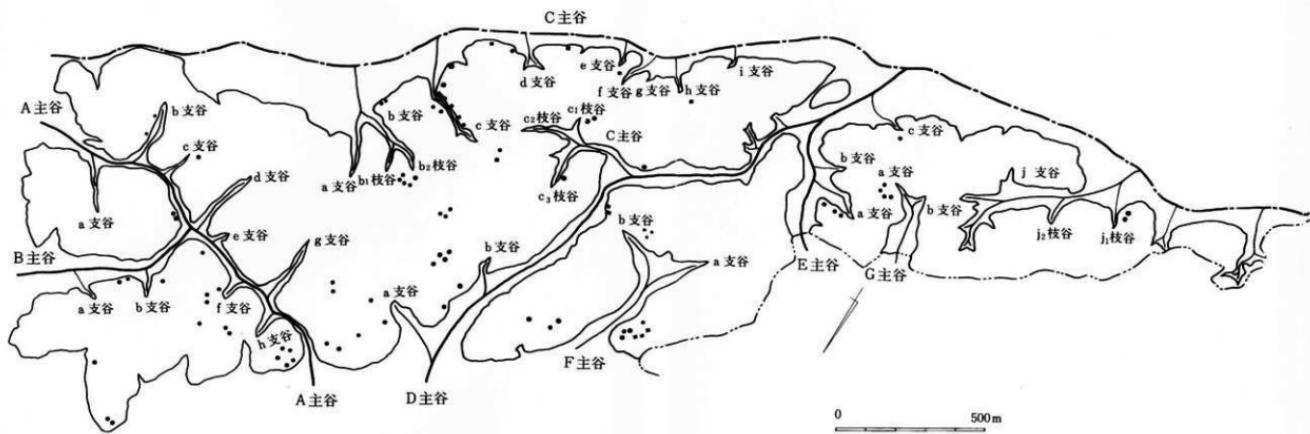
丘陵に入り込む谷によって、遺跡の分布状況をみることができる。

谷は、丘陵を貫通するもの及び平野部より丘陵深く伸びて枝谷を多くもつ谷を主谷とし主谷より派生するものを支谷、さらに支谷より分岐するものを枝谷とした。

主谷	支谷	枝谷	遺跡名稱
A	a b c d e f g h		戸津1号、一貫山1号、一貫山2号、一貫山3号、一貫山4号、一貫山5号 豆岡山1号、豆岡山2号、豆岡山3号  戸津2号  戸津3号、戸津4号、戸津8号、戸津9号、戸津10号、戸津11号
B	a b		戸津5号、戸津6号、戸津7号、戸津12号
C	a b c j	b <sub>1</sub> b <sub>2</sub>  j <sub>1</sub> j <sub>2</sub>	サンマイ谷1号、サンマイ谷2号、サンマイ谷3号、サンマイ谷4号、サンマイ谷5号 荒屋1号、荒屋2号、荒屋3号、荒屋4号  桃の木山1号、桃の木山2号
D	a b c	c <sub>1</sub> c <sub>2</sub>	二ッ梨1号、二ッ梨2号、那谷1号 殿様池1号、殿様池2号、殿様池3号、殿様池4号  奥谷1号
E	a b c		小天王谷1号、小天王谷2号 カミヤ1号
F	a b		矢田野1、矢田野2、矢田野3、二ッ梨14号、二ッ梨15号、二ッ梨16号
G	a b		大天王谷1号、大天王谷2号、大天王谷3号、大天王谷4号

表1 谷による須恵器窯の分類

戸津町より二ッ梨町に至り、平野部に開口するA主谷は、栗津町前面の平野部から南西方に伸びるB主谷と接続しており、さらに8支谷が左右に伸びている。A主谷に面して発見された窯跡は戸津1号窯の1基だけで、他はすべて支谷の奥または支谷の左右斜面に所在している。



第10図 谷道による遺跡の分布

C主谷では主谷に面してタタラ散布地が多くみられ、窯跡はサンマイ谷に1グループが認められ、c支谷にタタラ散布地と相対して2基の須恵器と開口部付近に2基の須恵器が確認される程度である。ニッ梨町より那谷町に至るD主谷は、中央部で丘陵に深く括がる支谷をもち、さらにいくつかの枝谷をもっている。この支谷では奥谷1号窯と開口部の那谷1号窯の2基の中世窯が分布する。D主谷開口部付近の丘陵南東斜面に数基のグループの分布がある。

E主谷は、加賀市箱宮町から伸びる谷で、那谷町地内でD主谷に合流している。この主谷の小天王谷では小天王谷1号窯、小天王谷2号窯の他、開口部付近に小天王谷1号製鉄址が所在する。F主谷はニッ梨町の背後に伸びる谷で、谷奥で2支谷が分岐しており、この部分にタタラ散布地が点在して、カナクソ谷とよばれている。G主谷は分校町より回折して伸びる谷で、大天王谷とよばれている。この谷奥に大天王谷1号窯を初めとする、4基の中世窯が分布する。

## 2 時期的な分布

地形的にみて、まとまりのあるグループのなかにあっても、時間的な隔たりがあるものや時期的推移が想定しうるものなど、グループによってかなり様相が異なるものがある。各窯跡の出土遺物の詳細な形式編年については、後章で若干ふれることとし、ここでは支谷毎に、どのような時期的分布を呈するかについて記述しておく。

まず、南加賀古窯跡群に所在する窯跡のうち、最も古い様相を呈するものは6世紀後半から7世紀前半頃に築造された分校古窯跡群である。小松市域内において古い様相をもつ須恵器を出土する窯跡は、ニッ梨10号窯である。これはD主谷に面する丘陵の南東斜面に位置するもので、これに相対するニッ梨8号窯とニッ梨13号窯などに近似している。しかし、谷ひとつ隔てた殿様池周辺のグループとは確実に形態的に差異が認められる。ついでニッ梨一貫山のグループをみると、一貫山では5基の須恵器窯が分布するが、一貫山1号窯としたものは、他と異なり形態的にもやや古い様相をもつ。他の窯跡、一貫山3号・4号・5号・6号窯は出土遺物から、かなり近似している。さらに戸津六字ヶ丘周辺の窯跡については、戸津8号・9号窯と戸津3・4号窯とではやや時間差が認められる。このことは、地形的にグルーピングが可能なものも、時間的推移のなかで狭義にとらえることの困難さを示すものであって、より広範な地域で考えなければならないのかもしれない。このことを考え合せ、B地区での時期的分布をみると、ニッ梨一貫山1号窯→林3号窯→戸

津5号窯→戸津9号窯→一貫山3号窯→戸津4号窯の時期的推移をみることができる。

同様に、中世窯跡についてみると、平安末期頃に始源が求められる壺器窯は、前代に須恵器生産が比較的少ない地域で生産を開始している。加賀古窯の始源となる奥谷1号窯の周辺ではまったく須恵器生産はみられない。奥谷1号窯と形態的に近似するカセイデ2号窯は同一工人の手によるものと推測するが、奥谷1号窯と一山隔った丘陵鞍部に構築されている。これに後続するものとして、オクダニの開口部に那谷1号窯がある。つづいて、中世壺器生産はD地区をこえたE地区に移る。E主谷a支谷小天王谷には、2基の小天王谷1号・2号窯が分布しており、時間的な経過とともに、さらに一山こえた大天王谷に移っている。

以上のことから総合して考えられることは、須恵器生産にたずさわる工人集団はわずかの数であり、分校町から二ッ梨町そして戸津町へと時間的に推移していると考えられるのである。

番号	名 称	所 在 地	地 目	番号	名 称	所 在 地	地 目
1	戸 津1号遺跡	戸津町	山 林	15	荒 屋10号遺跡	荒 屋 町	山 林
2	" 2号 "	"	"	16	" 11号 "	"	"
3	" 3号 "	"	"	17	" 12号 "	"	"
4	" 4号 "	"	"	18	那 谷1号遺跡	那 谷 町	"
5	" 5号 "	"	"	19	二 ッ 梨1号遺跡	二 ッ 梨 町	"
6	荒 屋1号遺跡	荒 屋 町	"	20	" 2号 "	"	"
7	" 2号 "	"	"	21	カナクソ谷1号遺跡	矢 田 野 町	"
8	" 3号 "	"	"	22	" 2号 "	"	"
9	" 4号 "	"	"	23	" 3号 "	"	"
10	" 5号 "	"	"	24	矢 田 野1号遺跡	"	"
11	" 6号 "	"	"	25	" 2号 "	"	"
12	" 7号 "	"	"	26	" 3号 "	"	"
13	" 8号 "	"	"	27	小天王谷1号遺跡	那 谷 町	"
14	" 9号 "	"	"				

表2 タカラ間連遺跡一覧

番号	名 称	所在地	地 目	時 代	番号	名 称	所在地	地 目	時 代
1	戸 津 1号窯	戸 津 町	山 林	平安(後)	34	二 ツ 梨 13号窯	二 ツ 梨 町	山 林	不明
2	戸 津 2号窯	"	"	" (?)	35	サンマイ谷 1号窯	荒 屋 町	果樹園	平安
3	一貫山 1号窯	二 ツ 梨 町	"	奈良(後)	36	" 2号窯	"	"	"
4	" 3号窯	"	"	平安(後)	37	" 3号窯	"	"	"
5	" 4号窯	"	"	" "	38	" 4号窯	"	山 林	"
6	" 5号窯	"	"	" "	39	" 5号窯	"	"	"
7	" 6号窯	"	"	" "	40	荒 屋 1号窯	"	"	" (中)
8	戸 津 3号窯	戸 津 町	"	" (末)	41	" 2号窯	"	"	" (?)
9	" 4号窯	"	"	" "	42	" 3号窯	"	"	" (?)
10	" 5号窯	"	"	" (初)	43	" 4号窯	"	"	" (?)
11	" 8号窯	"	"	" (中)	44	カセイデ 1号窯	二 ツ 梨 町	"	不明
12	" 9号窯	"	"	" (中)	45	" 2号窯	"	"	"
13	" 10号窯	"	果樹園	不明	46	二 ツ 梨 14号窯	"	果樹園	"
14	" 11号窯	"	山 林	平安(末)	47	" 15号窯	"	"	" (末)
15	" 12号窯	"	果樹園	不明	48	" 16号窯	"	"	"
16	林 1号窯	林 町	山 林	"	49	奥 谷 1号窯	"	山 林	"
17	" 2号窯	"	"	"	50	" 2号窯	"	"	鍾倉(初)
18	" 3号窯	"	果樹園	"	51	" 3号窯	"	"	不明
19	豆岡山 1号窯	二 ツ 梨 町	山 林	"	52	那 谷 1号窯	"	"	"
20	" 2号窯	"	"	"	53	矢 田 野 1号窯	矢 田 野 町	"	"
21	" 3号窯	"	"	"	54	" 2号窯	"	"	"
22	殿様池 1号窯	"	果樹園	"	55	" 3号窯	"	"	鍾倉(前)
23	" 2号窯	"	"	"	56	" 4号窯	"	"	" (?)
24	" 3号窯	"	山 林	平安(?)	57	小天王谷 1号窯	那 谷 町	"	" (後)
25	" 4号窯	"	"	" (?)	58	" 2号窯	"	"	" (?)
26	大 谷 1号窯	"	"	不明	59	大天王谷 1号窯	"	"	" (?)
27	" 2号窯	"	果樹園	奈良(末)	60	" 2号窯	"	"	" (?)
28	二 ツ 梨 7号窯	"	山 林	平安(初)	61	" 3号窯	"	"	" (?)
29	" 8号窯	"	"	古墳(後)	62	" 4号窯	"	"	" (?)
30	" 9号窯	"	"	不明	63	カ ミ ャ 1号窯	"	"	" (末)
31	" 10号窯	"	"	"	64	桃の木山 1号窯	"	"	古墳(末)
32	" 11号窯	"	"	奈良(後)	65	" 2号窯	"	"	" (?)
33	" 12号窯	"	"	古墳(後)					

表3 須恵器窯跡一覧

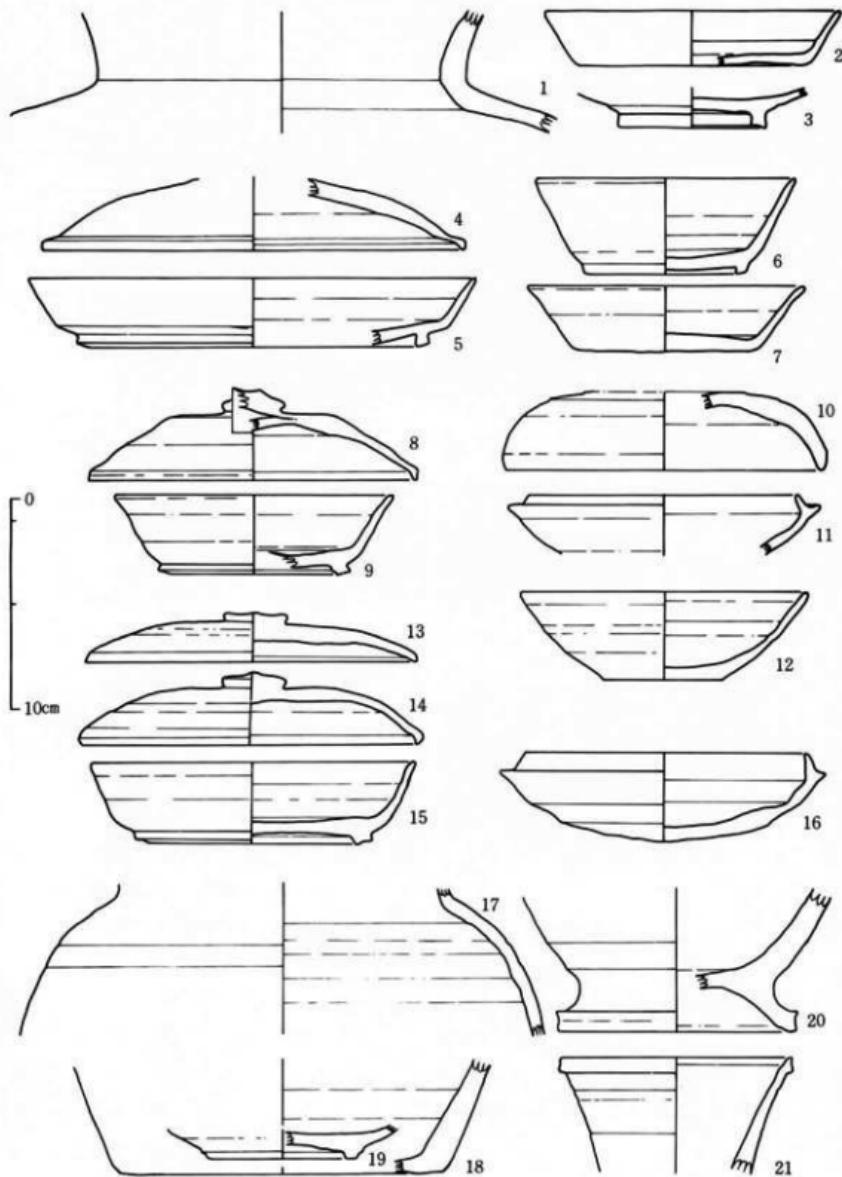
## IV 遺 物

分布調査で得た遺物はかなりの数にのぼるが、ほとんどが細片であり、なかには器形すら推察できないものが多くみられた。したがって実測しうるものは極く一部であって、これらをもって時期的な判断を下すことはできない。ここでは、これまでに発掘調査が完了している窯跡の出土遺物と比較検討し、若干の問題点を列挙するにとどめたい。

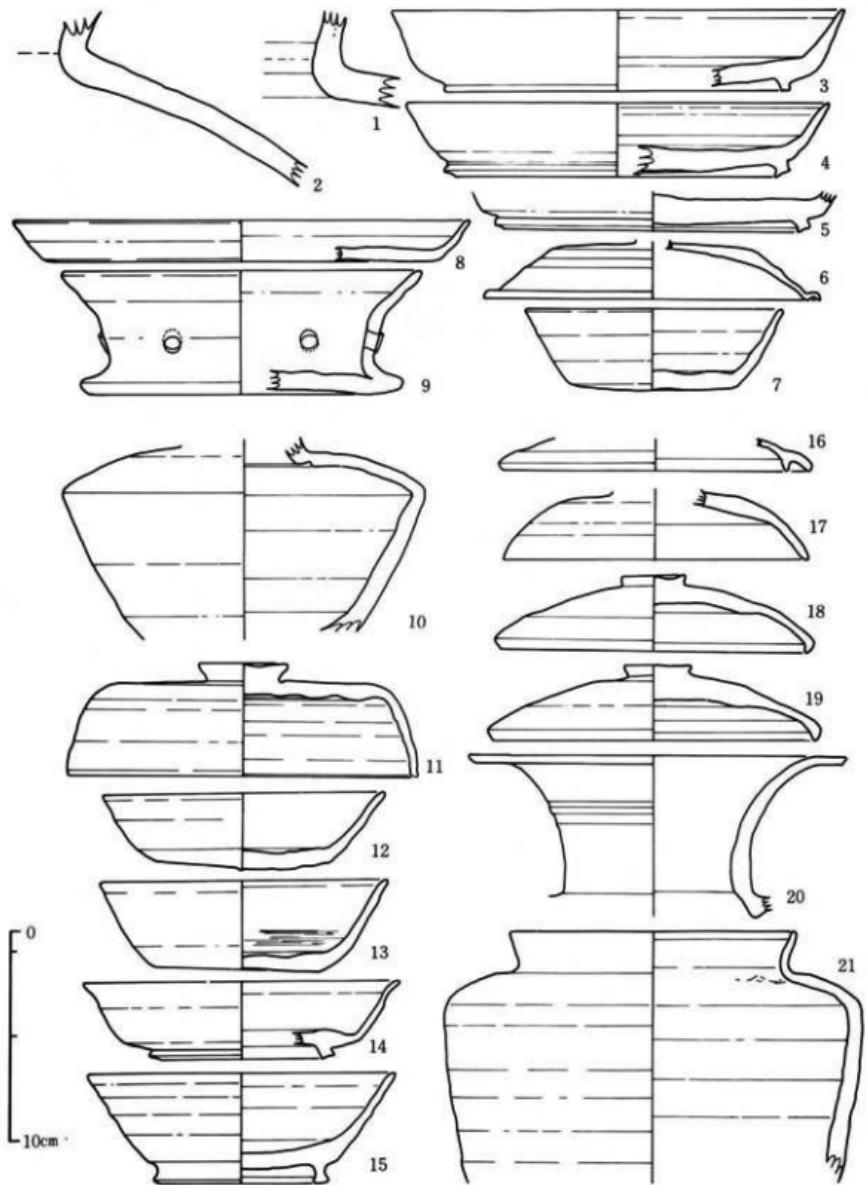
### I 須 惠 器

第11図1～3は、荒屋4号窯灰原出土の須恵器である。2は口径14cm、器高2.6cmを計る环であるが、焼成及び胎土は粗悪で、3の底部を糸切りで離す手法をもつ台付环とともに10世紀中頃の所産と考える。4～7はニッ梨4号窯跡出土須恵器である。4は口径20cmとやや大振りの蓋である。胎土は精良であり、口縁部の屈折が強い。6は口径12.3cm、器高4.6cmを計る台付环である。比較的小な貼り高台をもち、高台付近より直線的に口縁部に至るタイプは戸津5号窯出土品に普遍的にみられる。したがって、9世紀中葉頃の所産と思われる。8～11はニッ梨6号窯の灰原で採取したもので、二型式が混在していた。10・11の环・环蓋がセットをなすもので、やや古いタイプである。8は狭い天井部から直線的に口縁に至り、口縁端がわずかに外開きとなる。12は一貫山3号窯(4)出土の塊である。底部に回転糸切り痕をとどめ、器内外面ともに凹凸を残している。A主谷f支谷に分布する窯跡出土品と近似し、調整やプロポーションなどから10世紀中頃と考えたい。附近の一貫山4・5号窯もほぼ同期の築窯であろう。13～15はニッ梨13号窯(29)灰原出土の須恵器である。13は平腹な器形に、直線的に口縁を形づくる。14は口径15.9cm、器高3.5cmで、口縁端が逆三角形で内側に入るこむタイプである。15は口径15.4cm、底径11.2cm、器高3.9cmを計る台付环である。これらのタイプをもつ須恵器は今日まであまりみられなかつたもので、8世紀中葉頃に比定しても大過ないものと考えている。附近より16の环を採取しているが、ニッ梨13号窯付近に古式の窯跡の存在も考えられる。17～21は戸津11号窯出土の須恵器である。18・21は双耳瓶の破片である。19は台付皿ないしは台付环であろうが底部に回転糸切り痕をとどめている。20は台付壺とよぶものであろうか。大きく外方にのびる高台をもつもので、胎土や調整痕は戸津3・4号窯の製品に近似している。戸津4号窯の南約15mの斜面より採取したもので、ともに11世紀初頭ないし中葉頃の所産と考えたい。

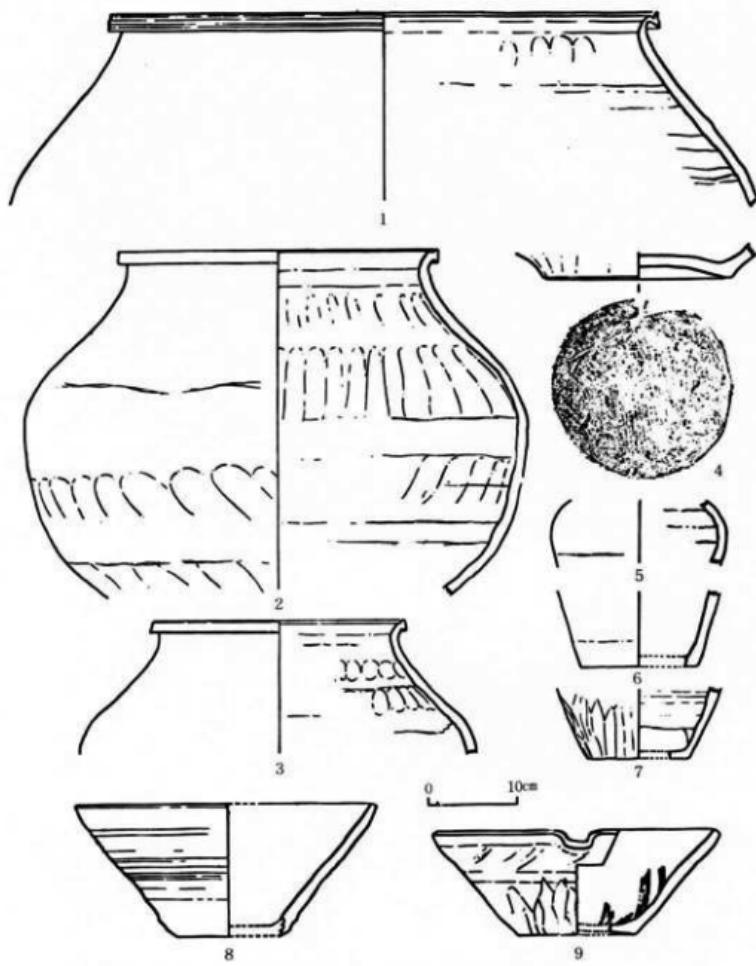
第12図1・2は林3号窯(18)出土の須恵器である。出土須恵器はすべて變破片であった



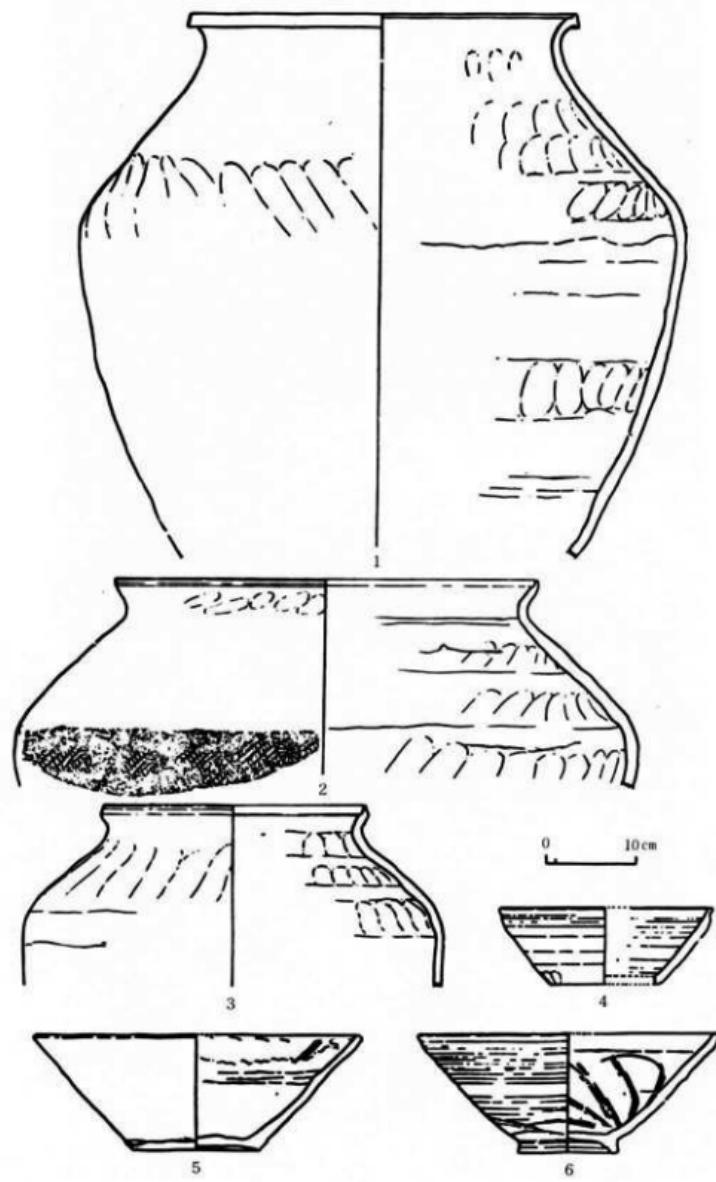
第11図 須恵器実測図



第12図 須恵器実測図



第13図 カミヤ古墳出土遺物実測図



第14圖 小天王谷古窯出土遺物實測圖

が、何分、試掘した範囲がわずかであるため、窯跡が存在することは断言できない。3～9は戸津5号窯跡付近で採取したものであるが、この窯跡の周辺は開田が行なわれているため、表探資料で判断できない。9の窯道具の他、形態の異なるものが多く出土している。10～21は桃の木山窯跡の須恵器である。11～12は桃の木山1号窯出土須恵器であるが、10はこれに平行した南側斜面での採取須恵器である。頸部と底部を欠く長頸瓶の胴部で、焼成やや悪く、肩部に多量の降灰が付着している。11は半完形の壺の蓋である。口径16.5cm 器高5.3cmを計る。12・13はともに精良な胎土をもつ环で底面に入念な調整痕をとどめている。14は安定感のある器形で、高台付近より横に大きく張り出して伸びる器形は口縁端部で外反する。これに対して、15は高台よりほぼ直線的に口縁部に至るタイプである。16～19は蓋であるが、共伴関係については厳密な検討が必要である。17はつまみを欠くが、天井部から丸く先ほそりの口縁端にいたるもので、これまで確認されなかったタイプである。20は双耳瓶であろう。ともに700年前後の所産と考えられるが、詳細な調査をもって検討する必要がある。

以上のほか、器形不明の細片が多量にある。分布調査はあくまでも遺物出土地点の確認と窯跡の存在有無の確認を目的としたものであって、須恵器の形態分類や共伴関係については他の機会に述べることにしたい。今回の分布調査では、6世紀後半に遡る窯跡は確認できなかつたが、7世紀後半より11世紀前半頃までの各時期にわたる窯跡が存在することが確認された。なかでも、奈良・平安朝の窯跡が圧倒的に多く、器種構成もかなり多様である。

## 2 瓷 器

漆器窯跡は、奥谷1・2号窯及び大天王谷1・2号窯が確認されており、今日までの調査で操業時期等については研究者間でかならずしも合意に達していない。分布調査は多くの不明点をもつカミヤ古窯と小天王谷古窯を対象とした。

カミヤ古窯は、第13図1～9、第14図1で示したもののはか多量に出土している。甕は口縁部の折り返しが強くなり、肩部は撫で肩で球状に近い胴部をもつものもあるが、長胴形を呈するものが多い。N字状口縁がより強くなるものもみられるが全体に退化的な様相をおびてくる。甕底部底面に板おこし痕をとどめるものと底面再調整痕をとどめるものがある。後者は糸切り底部の再検討の必要を指摘するものである。押印は3種類が確認され

たが、いずれも菊花を図案化したものである。擂鉢は2形態があり、ともにラフな落し目をもっている。こね鉢は片口を有するもので、底部よりやや直線的に口縁端に至るタイプである。本窯の時期において初めて壺類の焼成が確認された。口縁部の形状は不明であるが、肩部より胴部にかけて球状に近く、胴下半より直線的に底部に至る形態をもつものである。

小天王谷古窯跡の灰原出土遺物は第14図2～6で示した。1号窯灰原と2号窯灰原で若干数の遺物を採取したが、それぞれの遺物に時間差が認められないので総括的に述べることにする。

甕は30～48cmの中形甕に属するものである。口縁は先ばそりに直立する形態で、頭部が比較的強く外反するものが多い。内外面ともに入念な成形痕をとどめている。擂鉢は口径に比してやや小さい底部から直線的に口縁部に至るタイプが多く、なかには貼り高台を有し、底部より口縁部にかけて緩く湾曲するものもみられる。こね鉢は底部より口縁部にかけて全体的に湾曲するもので、口縁部をつまんで薄く仕上げられている。

以上、カミヤ古窯及び小天王谷古窯の出土遺物について概略を述べたが、これらは從来の加賀古窯の研究に新しい素材を提供してくれた。とくに小天王谷古窯で確認された擂鉢に高台を付す特徴は、越前窯の擂鉢に共通するもので、築窯技術や製品の共通性などの点から、他の瓷器系中世窯との関連において新たな問題を提起する。さらに最近福井県において灰釉陶器の生産が明らかになったといわれており、須恵器窯の発展から灰釉陶器の生産へ、さらに越前古窯への伸展は、加賀の古代須恵器生産から加賀古窯への移行という一連の発展過程とはけっして無関係ではない。既に調査された須恵器窯やその遺物の検討を通して、加賀中世窯の母体となる窯業集団の解明や中世窯業の発展過程を究明しなければならない。

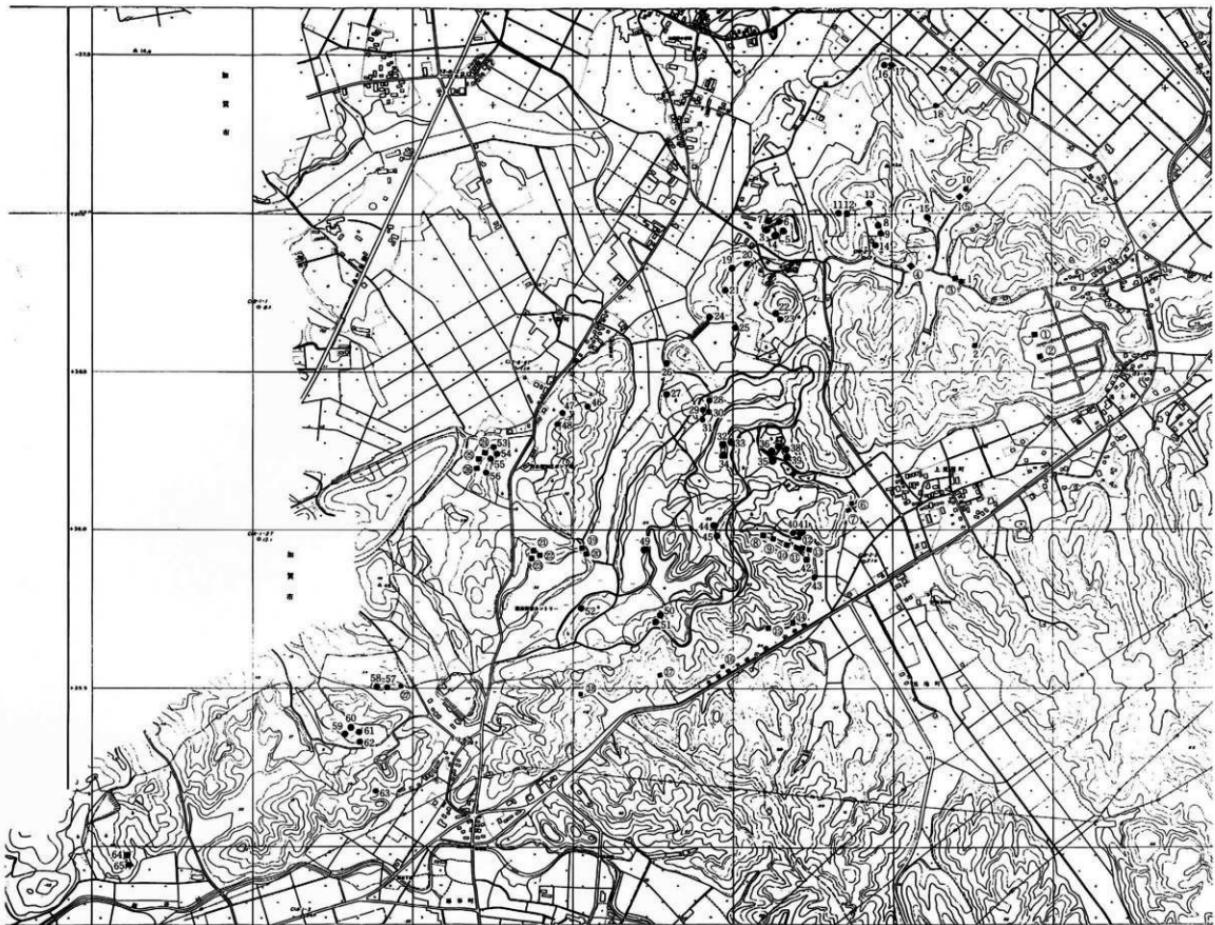
## V まとめ

2次に亘る分布調査の結果は前節で記述してきた如く、須恵器窯跡56基、中世壺器窯跡9基及びタタラ27ヵ所であった。しかし、これらすべてが窯跡本体を確認したものではなく、窯跡想定をも含んでいる。そしてタタラにいたっては鉱滓散布地の確認にとどまってしまった。南加賀古窯跡群と称している地域は加賀市・小松市にまたがって存在している大窯業生産地であり、今回の分布調査で発見・確認した遺跡以外にも、我々の目に止まらなかった遺跡がまだ多く残されていると考えている。今後も新たな窯跡の確認作業が続行されるよう全力を注いでいかねばならない。

さて、今回の分布調査で確認された窯跡には、立地条件、遺物構成等においてそれぞれ差異があり、従来の考え方や研究方法とも検討しなければならない多くの要素が明らかになつた。とくに中世窯跡については、平安末期以来、連続して生産が続けられていることが確認されたが、室町初期以降に下る窯跡が発見されなかつた。このことは、加賀の中世窯業生産が単に狭範囲の陶器生産にとどまっていたことを意味するものであり、一考を要することであるが、その反面、我々がこれまで実施してきた窯跡確認作業が狭い地域での活動であったことを指摘しているように思われる。

今回の分布調査は以上の如く大きな成果をおさめることができた。これらの成果は今後に予定されている小松バイパス建設、土地改良事業やカドミ対策の一貫としての土取採取事業等の様々な開発行為に対する埋蔵文化財保護対策の好資料となりうるものと考える。そして、これらの成果をふまえ、積極的な保護対策行政を遂行するワンステップとなることを確信している。

事業の実施にあたり、指導・助言をいただいた指導員の先生方は勿論のこと、多忙にもかかわらず、ご指導いただいた地元指導員の方々に深謝の意を表したい。





カミヤ古窯調査前状況（道路上方より）



カミヤ古窯調査状況（道路上方より）



カミヤ古窯調査状況（遺跡東方より）



カミヤ古窯第4トレンチ完掘状況



カミヤ古窯第2トレンチ調査中状況



カミヤ古窯第3トレンチ完掘状況



小天王谷2号窯灰原全景



小天王谷古窯第2トレンチ完掘状況



小天王谷第1トレンチ完掘状況



小天王谷一號窯第三トレンチ挖掘状況



戸津9号窯試掘状況



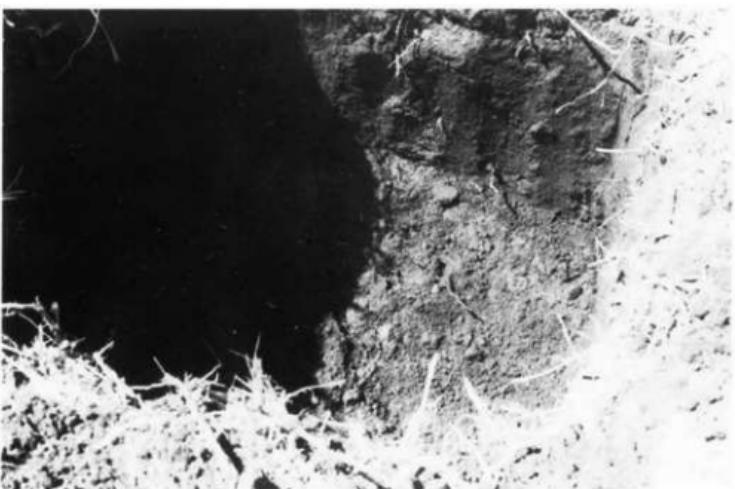
戸津11号窓試掘穿



林3号窓試掘穿



荒尾4号空試掘空



サンマイ谷5号空試掘空

圖版八 遺物



小天王谷2号窯跡出土大盤片



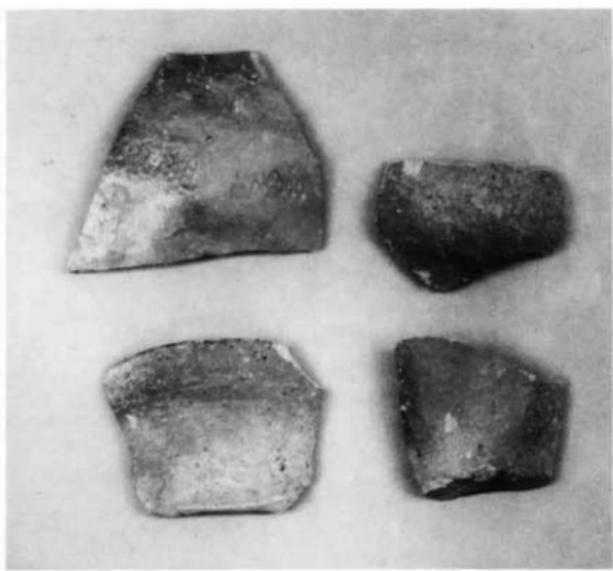
方ミヤ吉窯跡出土大盤片



カミヤ古窯跡出土大甕片



カミヤ古窯跡出土大甕片



カミヤ古窯跡出土スリ鉢・壊破片



カミヤ古窯跡出土大甕底部



カミヤ古窯出土こね鉢



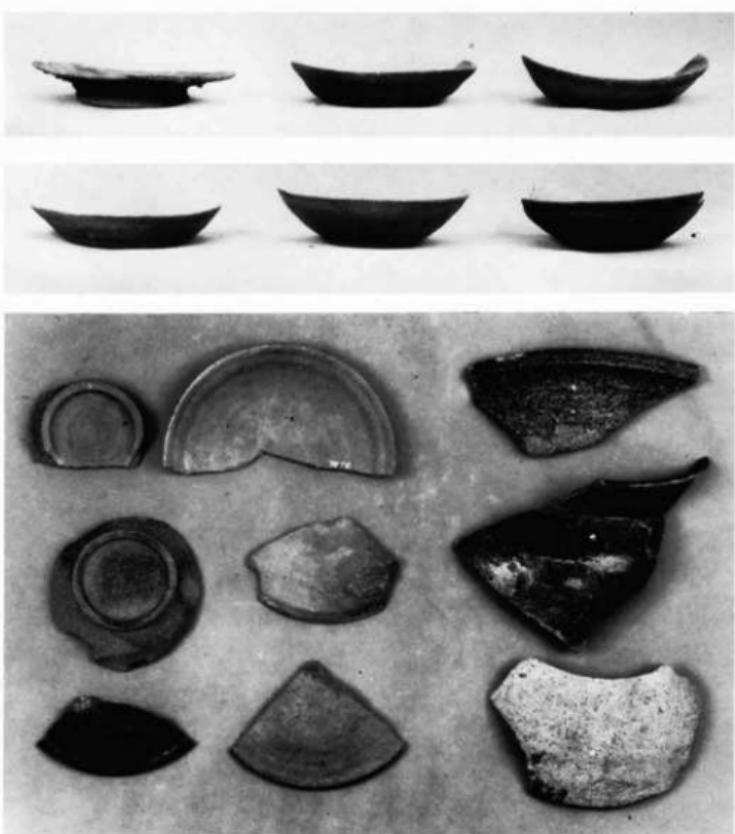
二ツ梨8号窯出土遺物



一貫山1号窯出土須恵器

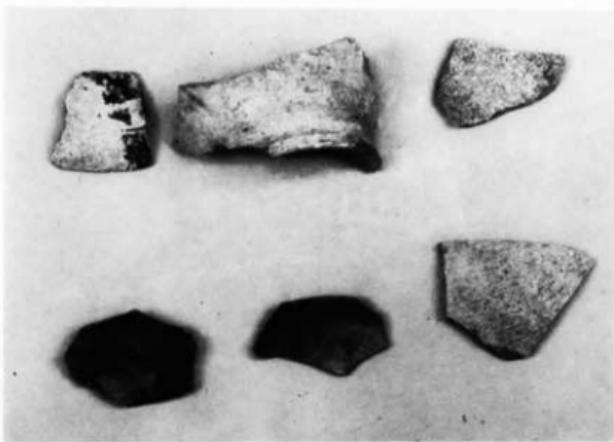
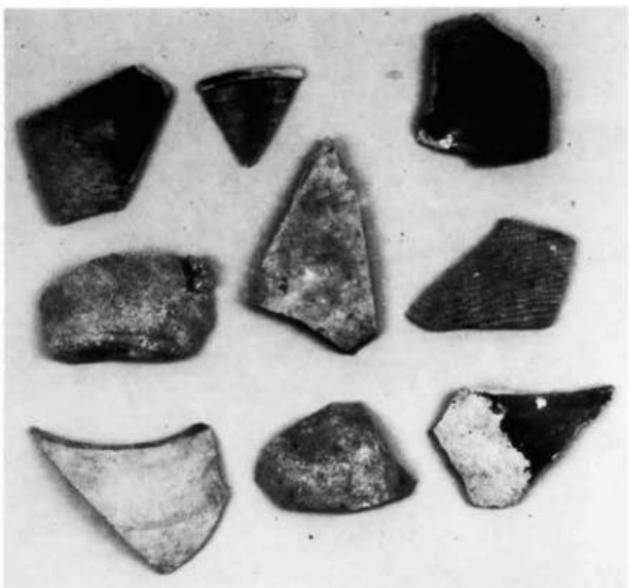


戸津4号窯出土須恵器



戸津9号窯出土遺物

図版一四 遺物



戸津11号窯出土遺物

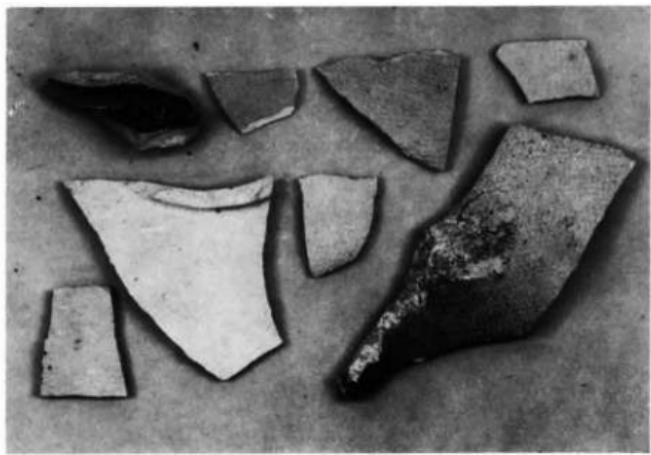


戸津12号窯出土遺物



桃の木山1号窯出土遺物

圖版一六 遺物



林3號窯出土遺物

南加賀古窯跡群詳細分布調査

昭和 54 年 3 月 20 日 印刷

昭和 54 年 3 月 31 日 発行

編集 小松市教育委員会社会教育課

発行 小 松 市 教 育 委 員 会

印刷 ア イ ワ 印 刷